

「つながる・支え合い」たより



元気で生き活きと過ごせる地域を目指して立ち上がった「もりもり健康塾」も3年目に突入。



元気で過ごすためには、老いも若きもみんなでわいわい楽しむこと。熟練した「男の料理」で腕を振るう。

地域で「つなぐ・つながる」⑥

▼元気で暮らすことができる
安心地域の実現を目指して

▼今や高齢者のみに留まらず、
多世代交流の受け皿に

青笹町の「もりもり健康塾」は当初「もりもり教室」として活動していました。その後、町内の健康づくりサポートが主体となり「青笹町民が元気で生き活きと暮らせる地域に！」をモットーに平成30年4月に「もりもり健康塾」が発足し、これまで色々な活動をしてきました。私が令和3年4月に青笹地区を担当する相談員になつた時、初めて拝見させて頂いた地域活動で、そのご縁で、現在も関わりを持たせて頂いています。

「もりもり健康塾」の活動は、体ほぐし体操やいきいき百歳体操といった体操教室が主体で参加者も高齢者が中心でしたが、男の集い（料理教室）やヨガ教室などの活動も行うことで、中学生や子育て世代も参加するようになり、高齢者の介護予防や居場所づくりにとどまらず、私としては、現在は多世代交流の場としての機能も担つていると実感しています。

この活動に関わらせていただいた中で、私自身が強く感じた事は、運営しているスタッフの方が「自然体で地域との関わりを大切にして活動している」ということでした。普段参加している方がお休みになれば気にかかる。或いは参加している方で顔色が優れなったり、元気が無かったりするときは親身になつて話を聞き、必要があれば地区相談員に情報提供をする。まさに、今、必要とされている地域の「見守り」や「防犯」といった機能をここで果たしています。

誰かに言われてから作られるものではなく、自然体だからこそ生まれる「支え合い」。その意識を今後も参考にさせていただき、青笹地区を担当する相談員として、笑顔を繋げ、生き活きと元気な地域であり続けられたいと再認識いたしました。今後ともよろしくお願ひいたします。

笑顔を繋げる「青笹もりもり健康塾」

、「生き活き元気で！」を合言葉に始まった地域の健康づくりを通した支え合い、

丸ごと相談窓口青笹地区担当 久慈 学

▼住民意識から生まれる自然体の
地域共生社会の形

TOWN DATA

一 青笹町 一 (令和3年11月末現在)

人 口 2,337人
(うち65歳以上人口 974人)

世帯数 859世帯
(うち高齢者一人世帯 187世帯)
(うち高齢者二人世帯 250世帯)

地域で「つなぐ ・つながる」⑦

タクシー代が低料金なので、
安心して買い物ができます



自宅玄関から、ドア to ドアで店舗まで安心して買い物ができます。料金は一律300円(往復)

玄関まで送ってくれて、
まとめ買いも安心♪



自宅玄関まで送迎しますので、米などの重い物のなんのその。安心して買い物ができます。

「地域支え合い 愛のり買い物支援モデル事業」
、地域で支える相乗りタクシー買い物支援の実践
丸ごと相談窓口遠野地区担当 佐々木 隆一

▼買い物支援事業実証実験を モデル地区で実施

遠野町の市街地においても、一部地域では小売店の閉店等により「店が遠く歩いて買い物にいけない」「重いものを持つて歩けない」「いつも親族には頼めない」「お店に行って自分の目で好きなものを買いたい」などの声が多く聞かれました。この声を、地域の共通課題としてとらえ、対象地域の高齢者を対象に民生委員によるニーズ調査を実施し、市街地の立地を生かした低料金で利用できる足の確保策をを社協遠野支部で検討しました。

試行運用として、小売店のない地区（遠野10、11区）をモデル地区に指定し、昨年十一月より「愛

（あい）のり買い物支援事業」として、十二名の登録者でスタートしました。利用者からは「低料金で、玄関から店舗までの送迎があり大変ありがたい」と好評をいたしましたことから、本年四月より遠野町まちづくり協議会の「遠野町まちづくり一括交付型事業」を活用し、正式にスタートすることになりました。

▼地域資源の活用を踏まえた 関係者との協働体制を構築

遠野町内には、スーパーや事業所などの多くの資源があります。地域にある資源を最大限に活用して買い物支援事業を推進していくためには、スーパーや事業所様の賛同と民生委員をはじめとする地

域の協力者との協働が大きなポイントとなると考えています。

なお、事業利用にあたっては、登録料を無料とし、利用条件は「買い物に困っている高齢者等」とし、高齢者が気軽に利用できるよう配慮しました。

運行は毎週木曜日の午前とし、民生委員が前日までに登録者から利用予約を受け付けた後、事務局で利用者をとりまとめ、二人以上の相乗りを組みタクシー会社に運行を依頼します。

利用者の負担は町内一律往復三百円の低料金で利用できます。（なお、経費については、一括交付金でまかなう。）当日は、地区的民生委員が利用者の買い物場所で待機しており、利用者の状況の確認や話し相手などをしています。

▼遠野町内全域運行を目指して

遠野町では年々独居高齢者が増加し、運転免許を返納された高齢者も多くみられます。五年後、十年後を見据えた足の確保対策が必要です。

この買い物支援事業は高齢者の孤立防止・介護予防、地域住民の交流など多くのメリットがあります。今後はこの事業を「地域の足」として定着させ、遠野町全域での運行を目指して支援していきます。

ご利用の流れ

自宅前 ⇒ 店舗 ※3人相乗り編成の場合

ドア to ドア（玄関から店舗） 高齢者が出かけられる仕組みに



TOWN DATA

— 遠野町 — (令和3年11月末現在)

人口 7,106人
(うち65歳以上人口 2,602人)
世帯数 3,343世帯
(うち高齢者一人世帯 766世帯)
(うち高齢者二人世帯 792世帯)



Close up!

輝け！ 地域相談員の視点から

地

域包括支援センターが開催する12月の地域ケア会議のお題は「除雪」。市道から自宅までの距離があり、自分ひとりで除雪をするのが困難な世帯の支援について検討しました。

みんなの地域でも、隣近所の支え合いによる除雪、地域の有償ボランティアによる除雪、或いは地元企業による除雪のお手伝いなど、様々な支援のカタチがあると思います。

このコーナーでは、地域ケア会議で検討された内容を持ち帰り、地域相談員が担当している地域の実情を含めてどのような資源が考えられるか話し合いました。

B グループ 地域⇒市の視点

担い手の不足。除雪だけのために人を集めるのは困難。消防団の活用は考えられないか。

除雪が大変といながらも何とか自力でできている人、何とかなっている人を見守る体制も必要ではないか。そして、地域から孤立している人をどうするかを考える必要があるのではないか。



例えば、除雪のことだけを考える会（仮称：雪國会議）をしてみるはどうか。様々な地域事情があるとはいえ、除雪は市の共通課題。各地区の課題を持ち寄って共有し、検討していくことが必要である。



感想

— 各グループの発表を聞いての感想 —

【A課長】 3グループがそれぞれ異なる視点で議論したことから、様々な見方があることがわかる。

地域の状況を把握（アセスメント）しておくことで、様々な視点をマッチングすることに役立つ。

地域の支援とつながっていない、困っている個人をどう支えていくかを考えていく必要があるのでは。

【B担当】 空き家の活用についてはこれまで意見が上がっていたが、具体的な活用に至っていない。生活支援ハウスは生活環境が良いのがメリットであるが、部屋数が少ないとことから、毎冬利用できない方がいることは事実である。

空き家の活用として支障となっているところを、どうやったらクリアできるか関係者で考えていく必要があると感じた。

※おことわり

本検討は、市では対応できない私道の除雪について検討したもので、市道等の除雪や置き雪の対応等については市が継続して行っています。また、テーマをもとに自由に相談員が検討・発言しています。

<話し合いの方法>

- テーマ：12月期地域ケア会議（除雪支援）の振り返り
- 検討方法：ケア会議の内容を振り返り、地域の除雪問題を自身の担当地区に置き換えて何ができるか意見交換し、結果を発表する。
- グループ数：3

A グループ 企業とのマッチングの視点

基本的に担当地区は、地縁で何とかなっている。地区ごとの課題は、排雪なのか除雪なのかそれぞれ異なる。企業によっては、地域貢献活動で除雪してくれる時がある。企業に働きかけ、企業を巻き込んだ除雪対策が可能とならないか？

また、若者を集めるためには、祭りなどのイベントも重要。祭りで集まつた若者のパワーをそのまま地域生活課題を解決するマンパワーに移行すべきればいいのではないか。



C グループ 空き家活用の視点

除雪の課題としてどうえることも大事だが、例えば冬期間自宅で生活し続けることで生活全般に支障をきたすケースもある。（外出する機会が減り、身体機能が低下する）

空き家を活用した冬期間限定のシェアハウスはどうか。長期間家を離れることに難色を示す方もいるので、昼間は自宅やデイサービスで過ごし、夜にハウスに帰ってくるという方法もあると思う。そのためには各地区に点在する必要があるので、空き家の活用が望ましい。

空き家の活用は、より自宅に近い環境での生活になるので、身体状況の低下等も起きにくいメリットがある。おそらく管理的な方が必要と思われるが、安全面から看護職・介護職のOB等に協力いただけるといいと思う。モデル地区で実施してみるのもいいと思う。



これからもさまざまなテーマで話し合っていきます。お楽しみに！

地域福祉計画基本目標の体系

基本目標1 人づくり～地域を支える人材の育成～

互いに支え合う意識の醸成を図るとともに、ボランティア活動や地域活動に進んで参加する人材の育成を進める

- ・ココロを育む学習機会の提供
- ・心のバリアフリーの醸成
- ・ボランティアの養成
- ・民生児童委員等地域活動支援体制の整備
- ・地域福祉活動コーディネーター（CSW）の設置



基本目標2 仕組みづくり～支援につながる・つなげる仕組みの展開～

困りごとなどを気軽に相談できる体制を整備するほか、福祉制度のサービスだけ貰えない部分を包括的に支援する仕組みづくりの推進

- ・総合的な相談支援体制の充実
- ・社会的孤立の防止
- ・生活困窮者・生活保護受給者の自立支援の促進
- ・子どもや子育て家庭への支援の充実
- ・福祉サービスの情報発信
- ・災害時要援護者の支援
- ・成年後見制度の利用促進



基本目標3 まちづくり～新たな地域支え合いの構築～

個人、団体がより一層活躍できる地域を目指して、多様な人たちがつながって資源創出に取り組む地域貢献活動を推進する・小さな拠点と連携した福祉事業への住民参加の促進

- ・新たな地域支え合いの促進による生活支援サービスの提供
- ・ボランティア団体等に対する活動支援
- ・社会福祉法人等の地域貢献活動への支援



前号では、地域共生社会の実現に向けて、地域福祉計画について触れ、また、市が本年三月に策定した第四期地域福祉計画の基本理念について紹介しました。

今回は、より具体的な取り組みについて、地域福祉計画の基本目標と事業内容を中心にご紹介します。

▼**基本目標と事業内容**

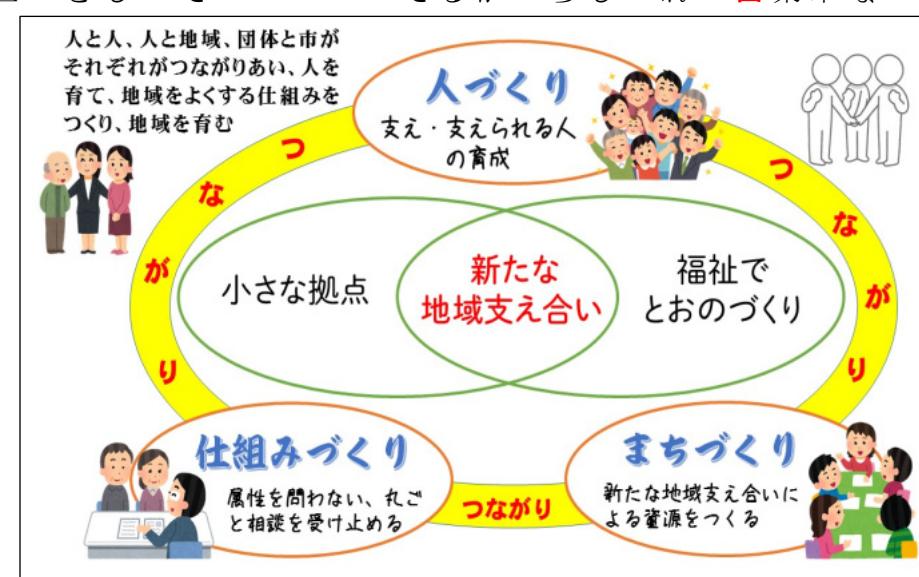
地域福祉計画における具体的な取り組みについては、三つの基本目標が掲げられ、それぞれの施策が盛り込まれています。（左上図参照）

これらの目標や事業が展開されることにより、すべての市民が、心身ともに健やかでいきいきとした人生を過ごし、助け合いながら輝く町づくりに取り組むために、行政、市民、関係機関・団体等が協働で取り組むことが必要であると地域福祉計画の中で述べられています。

▼「新たな支え合い」による
「福祉でとおのづくり」
「福祉でまちづくり」

市では、「福祉でまちづくり」を各福祉計画に掲げることにしています。市と社会福祉協議会は、福祉を推進する「車の両輪」として、これまでも協力・連携しています。

しかし、課題を抱える個人や世帯への個別ニーズへの対応は、公的支援の活用のみでは限界を迎っています。課題解決のために、地域住民が自ら取り組み、「新たな地域支え合い」を築くことによって、地域をよりよく変えていくまちづくりが求められています。この取り組みを「福祉でとおのづくり」と称しています。



「新たな地域支え合い」とは・・・

地域の課題を、他人事ではなく、「我が事」として捉え、地域住民自らが課題解決に向けて取り組むとともに、誰もが役割を持ち、人と人が支え合う仕組みを広げていく必要があります。

そのため、個別視点を起点として生活課題の解決に向けて地域住民との継続した働きかけを行う専門職である「コミュニティソーシャルワーカー」を配置して、自治会などの地域運営組織と連携して、「地域支え合い」を新たな仕組みで進めていくものです。

次号では、新たな地域支え合いを推進していく今年度から取り組んでいる事業について紹介します。

「小さな拠点」による地域づくりを進めているところです。それに伴い、従来の「地域支え合い」の仕組みを見直し、「新たな地域支え合い」を推進していくことを目指すのです。

▼「小さな拠点」による、
「新たな地域支え合いの推進

みなさんもご承知のとおり、十年、二十年先の地域の将来を見据えた新たな市民協働の仕組みを構築するため、地域運営組織の見直しや地区センターの指定管理者制度の導入、行政区再編などによる、「小さな拠点」による地域づくりを進めているところです。それに

「地域共生社会」の実現における地域福祉計画から制度と取り組みを知る